

基礎経済科学研究所 自由大学院

大阪第三学科(金融流通協同組合論ゼミ)からのたより

[第885回ゼミ報告] 2024年9月6日号

大阪の8月最高気温: 1950/32.2、1960/33.1、1970/32.6、1980/30.6、1990/34.7、2000/35.1、2010/35.2、2020/35.7、2024/35.4 年々上昇!!
7月24日のゼミは、佐々木隆治『資本論第3巻』の第2章「利潤の平均利潤への転嫁」の第1節「異なる生産部門における資本の構成の相違とその結果生じる利潤率の相違」、第2節「一般利潤率(平均利潤)の形成と商品価値の生産価格への転化」を小野さんの報告でおこないました。平均利潤に関し、剰余価値の現象形態として理解し、利潤概念と競争による利潤の平均利潤への転化が発生。資本の有機的構成の相違と資本の回転の相違による利潤率の相違。産業部門では、価値論が現実の運動と矛盾し、現象の奥にあるメカニズムを解明する。平均利潤の形成で商品価値が商品価格へ転化、可変資本の回転が密接に関係している。商品の総価格は総価値に等しく、競争によって様々な利潤率が一つの一般的利潤率へと均衡化・形成される。一般的利潤率の変化は、現実には剰余価値部分、費用価格部分も変化する。現実には様々な利潤率の平均である一つの一般的利潤率へと均衡化される。商品の中には、労働者では消費されず、大部分が資本家により消費される奢侈品が多く含まれている。この奢侈品の生産部門での有機的構成とそれ以外の商品の有機的構成が異なる。資本家の眼前にあるのは商品生産の総労働ではなく、生きた生産手段か死んだ生産手段という形態で支払った総労働の部分である。費用価格に付け加えた利潤は、生産部面での固有な価値形成でなく、全く外的に確定されたものである。

討論では、Cの費用価格と生産価格の問題点、Cを他の資本家から買った場合、費用価格と生産価格が異なるのではないか。単一の資本家として想定していることについて、一般的利潤率と平均利潤率との関係。総計一致の関する問題、競争では一致する。マルクス均衡の問題が佐々木の目的。森嶋道夫によるヨーロッパでの議論も重要。スーパーマーケットは〇〇%の値引きに対し、コンビニでは価格維持だ。フードバンクに品物が集まらない。会場参加は小野さん・川口さん・山口さん・高田、オンライン参加は竹内さん・後藤さん・田中(興)さん・井貝さんの合計8名の参加でした。

* 9月11日(第2週)ゼミも、午後5時半(or 45分)から8時です。

・オンライン情報 Zoom: ID: 835 5866 8051 パスコード: 385096

* 9月11日ゼミは、斎藤本4章4～6節を引き続き後藤さんの報告

***** ゼミ日程 *****

9月11日(水)午後5時半～8時 堺筋本町瓦町・アイクルの部屋
斎藤幸平『マルクス解体』4章5～6節一元論・同一性報告・後藤さん
9月25日(水)午後5時半～8時 堺筋本町瓦町・アイクルの部屋
佐々木『資本論第3巻』第2章3～5節「平均利潤転化」報告・小野さん
10月9日(水)午後5時半～8時 堺筋本町瓦町・アイクルの部屋
斎藤幸平『マルクス解体』5章ユートピア社会主義の再来 報告者未定
その後 10/23, 11/13, 11/27, 12/11, 12/25 [アイクルの部屋]

◇第三学科事務局/高田好章: ytakada@kcn.ne.jp 090-8658-3755
HomePage: <http://ysweb.g.dgdg.jp/ytakada/kisoken/> Pass: kiso